宙の赤

小松陽子

元日の朝はこよなく輝きて天照神は治世をつつむ

降り頻る雪を背負いて凜と立つ老梅我が家を守るが如く

綺麗ねと病床の姉指をさす赤鮮やかにさざんか二輪

今日もまた姉の電話は迷いなく私の元へとひた走りくる

夕焼けか紅葉のあかか宙の赤　母の背で見た記憶あざやぐ

久々にふるさとの家訪ぬれば蔦に覆われ朽ちるを待つのみ

嬉しさも悲しさもあり明け方の愛犬の夢泡と散りゆく

次の世も連れて行ってとせがみし友ひと足先に月へ旅立つ

逝きし友の愛せる湯のみ吾の手に　名を呼びいつしか語りかけおり

がんばれと言えばかぶりを振りし叔父天寿を極めて九十五歳